



高池 義方

設計演習 I

第1課題  
リノベーション  
〈都市(街)の愛すべき古い建築  
に命を……〉

第2課題  
都市型集合住宅  
〈「集まって住む」ということ  
の意味を問い直す〉

3年2組

担当：  
横河 健  
62

【第1課題】

高池 義方

世界的な都市であるこの東京で、このような古い建築が残っているのは大変貴重なことである。それは日本の特別な社会構造が、まだ存在すべき建築を破壊し、その土地にまた新しい建築を建てるというスクラップ&ビルドを繰り返してきた結果であろう。

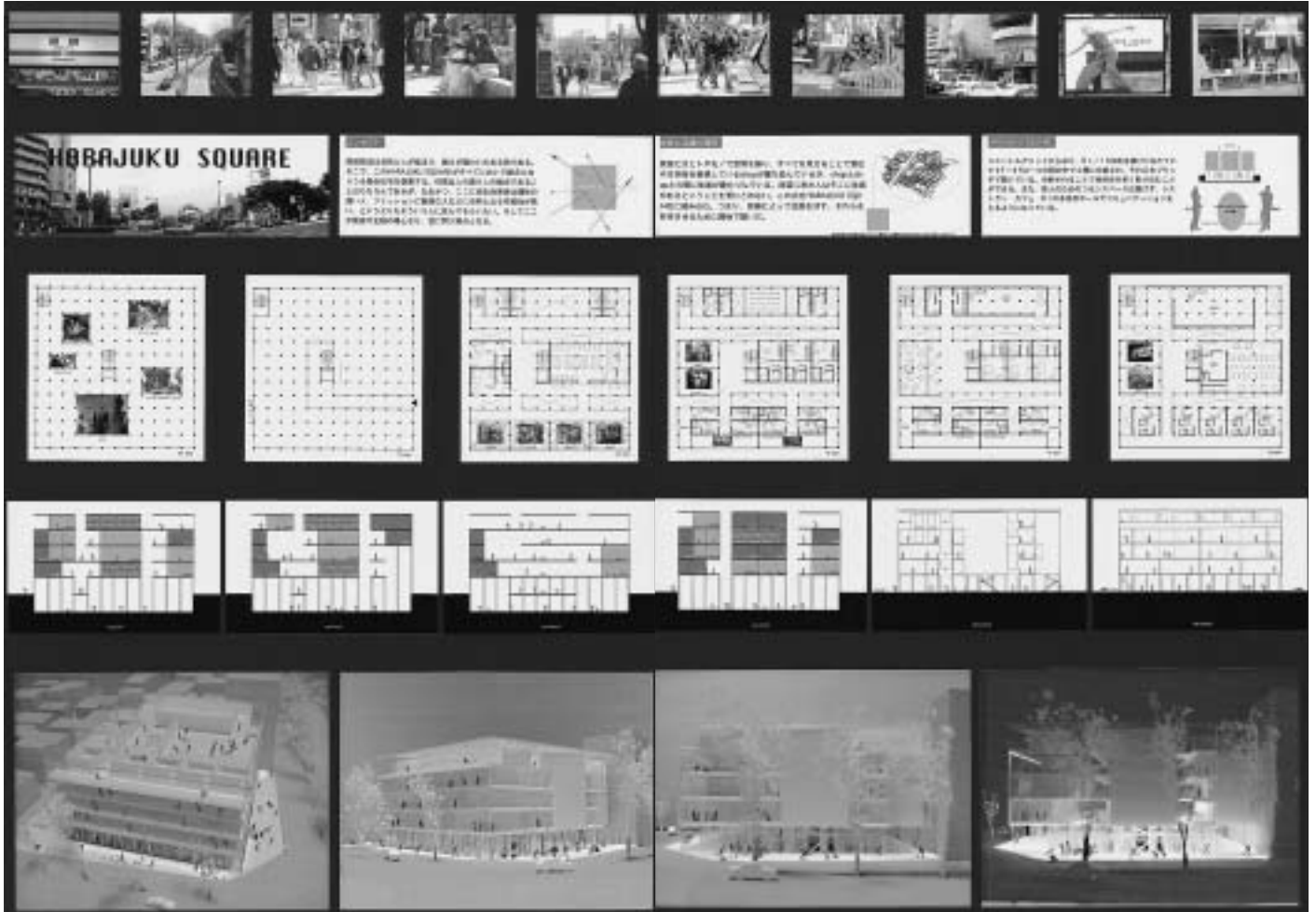
そこで、長い間ここにオフィスビルとして建ってきたこの三信

ビルを情報ライブラリーとして、新しい時代の、新しいプログラムを与え、この建築に命を吹き込むことにする。外部は、時代・人間・街並みをキーワードに、ファサードはそのまま残し、これからもこの土地で生き続けてほしい。

指導＝横河 健

日本では何事にも短期的な経済優先という世界的に見てもその特殊な社会構造の中で、古い建築の保存再生を試みることはそう簡単なことではない。しかし、高池案はその要請に応え、三信ビルのある地域つまり都市的な意味性から調査し提案を試みていて、三信ビルの様式建築としての特徴である三層構造の外観

の保存修復を取る一方、内部でもその構造を利用し1,2階の既存吹抜空間を利用して情報ギャラリーとも言えるようなオフィスワーカーへの情報発信基地を設け、3階から7階までの空間は斜路や吹抜を含む立体的なモダンアートギャラリーを構成している。さらに最上階ではアートスクールを創設することによってアートギャラリーとの密接な相互利用が期待され、建築的にも楽しいだろう。ここでは、課題のタイトルにもあるように単なる保存から一歩進め、機能的な追加充実とともに新たなプログラムを組み直し、時代性をもその建築に付加しようとするものとして評価したい。



【第2課題】

鈴木 清久

原宿は若者で絶えず賑わっている。しかし、一步路地に足を踏み入れると、静かな住宅が建ち並び、人々の生活感を感じ取ることができる。原宿はこの2つの顔を持った町といえるだろう。

HARAJUKU SQUAREはこれらをイメージさせる集合住宅とした。

shopとhouseが混在し、表

向きのshopがhouseを消し去る。この2つを共存させるために、立体路地でつながれている。

指導=横河 健

東京原宿は表参道と明治通りの交差した角にその土地はある。明治神宮への表の参道として計画整備された歴史と同潤会アパートに見られるケヤキ並木と一体になった街並み。それらのコンテクストを考えることと同時に今や若者の街原宿と化した商業的アプローチ、さらに東京の都市生活者としての住居の在り方などなど、この課題の提起しているものは現在の建築家の抱えている問題の縮図とも続くものである。

鈴木案は地下と1階の吹抜空間に柱を林立させたピロティという、かなりストイックなイベントギャラリーと、2階より上部はショップと住居の渾然一体となった建築である。

このプログラムの考え方や建築の表情は共に時代性を表している、どこの繁華街にもあるような既成のスタイルつまり、交差点のコーナーを意識した商業建築の発想ではなく、あえて独立した初期近代建築のすがすがしさといおうか(?)均質で端正な表情にとどめていることも良い。これは経済論理に従った安易な容積率の消化ではなく、どちらかというと同潤会アパートからの街並みのコンテクストを重視した結果ではなからうか。